



る グ ラ
部 が ブ
川 屋 聴 ・
西 / こ ソ
蘭 / え ン

クラブ・ソングが聴こ

集英社

川西 蘭

一九六〇年広島生。早稲田大学政経学部卒。

著書

「春一番が吹くまで」

「空で逢うとき」

「はじまりは朝」

「バイレーツによろしく」 (以上、河出書房新社)

「妖精物語」

「プロローティガンと彼女の黒いマフラー」

(以上、トレヴィル)

ラブ・ソングが聴こえる部屋

一九八六年二月一〇日 第一刷発行
一九八七年二月一五日 第三刷発行

著者 川西 蘭

発行者 堀内末男

発行所 饅 集英社

東京都千代田区一ツ橋一五一一〇
郵便番号 一〇一

出版部 (〇三) 二三八一二八四二
電話 販売部 (〇三) 二三〇一六一七

製作課 (〇三) 二三八一二九六四
印刷所 大日本印刷株式会社

定価 一、二〇〇円

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載することを禁じます。

目次

マイ・シュガー・ベイブ

5

チープ・スリル

73

ジェラス・ガイ

141

マイ・ラスト・アフエア

203

装帧——内部
カバ——写真——星川律江

ラブ・ソングが聴こえる部屋

マイ・シュガー・ベイブ

最後に時間を貰って、僕の好きな話を一つしたいと思う。昔、一緒に暮らしていた友だちがたったのお話なんだ。友だちがどこにいるのか、残念ながら、僕は知らない。連絡がないんだ。だけど、もしかすると、ラジオを聴いてくれるかもしれない。もし、聴いていたら、電話してくれないかな？ もう一度会って話をしたいとずっと思ってるんだ。

友だちがつくったお話は、象の足をテーマにしたとても短い物語りだ。だから、ラジオの前のみんな、ちよつとでもうたたねなんかしていると、聞き逃してしまうかもしれない。今のうちにトイレに行ったり、熱いコーヒーを入れたりして、待っていて欲しい。何だか紙芝居屋になったみたいだね。

じゃあ、『ミッドナイト・アワー』の最終回を始めよう。テーマ・ミュージックは、もちろん、『ミッドナイト・アワー』バイ、ロキシー・ミュージック。

マイクのスイッチを倒す。副調整室の方を見ると、若いディレクターが指でOKのサインを出していた。ミキサーが一人、忙しくレコードを用意している。ぼくは目の前のマイクに視線を移

す。ふくれたアイス・キャンディの形をした高感度マイク。三年余り、ぼくはこのマイクとつきあった。月曜日から金曜日の深夜一時から五時まで、週に二十時間。総計何時間くらいになるのだろう。一年が五十二週、三年で百五十六週。掛ける二十は、三千百二十時間、気が遠くなりそうだ。

テーマ・ミュージックに続いて、CM。キュー・シートを揃えて、一番上の曲を見る。全米ヒット・チャートで五位の曲の名前がかいてあった。

ぼくは今夜限りで『ミッドナイト・アワー』のDJを辞めることになっていた。それだけでなく、ラジオの仕事からも離れるつもりだった。明日からは、「ブルー・デイ・狐」と呼ばれることもない。冗談を考えたり、パカ話をしたり、曲を選んだり、葉書を読んだりする必要はない。せいせいの気分だ。家具や生活用品をすべて運び出したあと、ガランとした部屋に立っているみたい。

ディレクターがガラス越しにキューを出す。ぼくは目でうなずいて、マイクのスイッチをオンにする。

春は名のみ冬は寒いよ、とか何とか。いやあ、随分春めいてきました。いかがおすごですか？ 健全にセックスしてます？ まあ、そんなことどうでもいいんだけどね、一応時候の挨拶をするように書いてあるからね。深い意味を追求することなく、曲にいつてみようか。

ぼくがラジオと最初に関わったのは、今から五年ほど前、大学を卒業した頃だった。ラジオ局に音楽サークルの先輩がいて、彼が仕事をくれた。ぼくは先輩に言われるままに、聴取者からの

葉書を選んだり、レコードの順番を決めたり、差し入れの寿司やケーキを抜けめなくつまんだりしていた。番組の手伝い程度だったけれど、ぼくの唯一の定期的な収入源だった。

「ブルーディ・狐」として仕事を始めるまで、ぼくは余り才能のない構成作家だった。それでも、最後の頃には、音楽番組を一人だけで構成していた。

当時、ぼくは女の子と二人でラジオ局から遠く離れた（電車を乗り継いで、二時間くらいかかった）海辺の小さな借家にすんでいた。

平屋建ての傾きかけた木造住宅は国道ぞいにあり、道路より一メートルほど低い柔らかな土地の上にたっていた。陽あたりは悪く、陽が暮れる頃になって、やっと少しだけ赤い光が窓から射し込んできた。彼女はよくカボチャを買って来て、うんざりするくらいカボチャ料理を作った。

これだけ陽に当たらずに、ビタミンも摂らないでいると、カッケになるわよ、と彼女は言った。建てつけもおそろしく悪かった。押し入れのフスマは一度開けたら、閉めるのは一苦労だった。

客が来ることもないので、押し入れはいつも開け放しになっていた。畳も波うち、鴨居も湾曲し、真直ぐなところはどこにもなかった。雨漏りがしないこととゴキブリがいらないことだけが取り柄だった。部屋に寝転がっていると、とても貧しい不思議の国で家を借りたような気分がした。空間までがねじ曲がっている感じがして、現実感が酷く薄かったのだ。

彼女は、悠という名前で、二十二歳の学生だった。本来ならば親の仕送りだけでも優雅に暮らせるはずだったのに、ぼくと一緒に暮らし始めたことが親にバレて、仕送りをとめられてしまった。

ごく単純なミスで事は露見した。二本ある電話のうち、彼女の方の電話にぼくが間違つて出てしまったのだ。引越して、一週間もたつていない夜だった。悠は風呂に入っていた。ぼくは鼻の大きなタレント・アナウンサーのために冗談を考えていた。ラジオだけで人気のある彼に対して少しでも鼻について何か言うことはタブーだった。ぼくはその日全くの不調で面白いことを何一つ思いつけなかった。頭に浮かんでくるのは、アナウンサーの大きな鼻だけだった。どっしりとした相撲取りが坐ってるみたいなのやつや光る鼻。一目見れば、誰だって吹き出しそうになる。いけないいけないと思うと、逆に鼻についての冗談しか考えられなくなる。いっそのこと、芥川龍之介の『鼻』をパロディにして、アナウンサーに渡したら……いやいや、首を振る。まだぼくはラジオの仕事を失いたくない。

電話がなった。反射的に受話器を取つて名乗った。気付いた時にはもう遅かった。悠を出して下さい、と彼女の父親は不気味なほど落ち着いた低い声で言った。

ぼくは風呂場に行き、曇りガラスをノックして、お父さんから電話だよ、と忠実に伝言した。悠を出してくれ、と言ってるよ。

鼻歌が跡切れた。ザバンと湯を体に勢いをつけてかける音が聞こえた。

彼女はバス・タオルを体に巻きつけたまま三十分近く父親と電話で話していた。ぼくは台所のテーブルで冗談を一つ書き上げ、それから何と言つて彼女に言い訳をしたらいいのか考えていた。電話を終えて、彼女は台所にやって来た。鼻をぐずぐずさせて、風邪をひいちゃった、と言つた。

「怒ってるだろうね、あなたの父上は」

「娘が得体の知れない男と暮らしていると聞いて、ケタケタ笑う親はいないわ」

「原稿に集中してたから、電話の色を見分けるのを忘れたんだ」

悠の電話はアイボリー・ホワイトでぼくの電話はグリーンだった。コンデিশョン・グリーンにひっかけて色を選んだ。コンデিশョン・グリーンは、軍事用語で、緊急発進という意味だ。

「挨拶もしない男だって、言ったわ」

「初めましてとでも言っておけば良かったのかな？」

「今晚は、くらいでいいんじゃない？」

くしゅんと彼女はくしゃみをした。髪の毛は濡れ、肩に張りついていた。ティッシュ・ペーパーで鼻をかみ、それから彼女は書き上げたばかりのぼくの原稿を手にとった。

「これのせいで、私は……」

何か早口で言ったけれど、ぼくには聞き取れなかった。読み終えると、彼女はバサリとテーブルに原稿を落とした。

「どう？ 笑えるだろう？」

「涙が出そう」と短く彼女はコメントした。

「余りいい出来じゃないことは分ってるんだ」

ぼくは原稿をクリップで留め、朝一番でラジオ局に持っていくために茶封筒に入れた。

「本式に風邪をひいちゃうぜ、いつまでもそんな格好でいると」

春とはいえ、まだ夜は肌寒い。加えて、潮の香りがするすき間風は裏口から玄関まではばかりことなく吹き抜けていく。

「重大発表があるのよ」脚を組み直して、彼女は言った。クリーム色のバス・タオルが割れて、余り肉づきの良くない太もものがのぞいた。白い肌にはつややかな光沢がある。

「聞きたい？」

「いい話ならね」

「うちの親父さんの宣告なのよ。いい話なわけじゃないじゃない」

「聞かなきゃいけないかな？」

悠はうなずいて見せた。ぼくも仕方なくうなずき返した。

「じゃあ」と彼女は言った。「先にお風呂に入って来て。ガスをつけっ放しで出たから、今ごろ煮立ってるかもしれない」

「それを先に言つて欲しかった」

あわててぼくは台所を駆け出した。廊下を曲がる時、大きなあくびをしている彼女の姿が目の端に見えた。彼女はくしゃみを一つして、鼻をすすり上げた。

風呂から上がって、パジャマに着換え、部屋に戻ると、悠はもう布団にもぐり込んでいた。広い場所で眠るのが好きで、彼女はいつも布団を三つ並べて敷いた。二つならある情緒を感じられるけれど、三つになると修学旅行みたいだった。だって、あなた結構寝相が悪いのよ、と彼女は言う。だけど、三つのうち二つ半までは絶えず寝返りを打ち、足を蹴り上げ、手を伸ばす彼女が使っていた。

「眠ったのか？」

乾かした長い髪の毛のなかに彼女の顔は埋まっていた。癖のない細く柔らかな髪の毛だ。ぼくは彼

女の髪の毛を指にからめて意味もなく時間をすごすのが好きだった。幻想的な絵画展を散策しているみたいに豊かな様々なイメージを感じ取ることができた。余り長い時間ぼくが指にからめたり、引っ張ったり、唇をつけたり、匂いをかいだりするのを彼女は嫌がった。二回洗うとシャンプーが一本空になっちゃうんだから、と彼女は言った。ぼくの手はそんなに汚れてないよ。手には目に見えない汚れや脂がいっぱいついているのよ。じゃ、ぼくはどうすればいい？ 髪だけじゃなくて、もっと他のところを触れば？

「眠ってないわ」

彼女は答えた。鼻声だった。

「重大発表を拝聴しようか」

「灯りを消して、布団に入って、私を抱いて」

ぼくは彼女に言われたことを、言われた順番にした。彼女の体は熱く火照っているみたいだった。シャンプーとセッケンの香り、それから洗いたてのシーツからは海の匂いがした。

「あなたと別れるか実家に連れ戻されるか、どちらか一つを私は選ばなければならぬみたい」

「ぼくと別れれば、あなたは学生生活を続けられるわけだ」

「そういうこと。親父さんは頑固だから、やると言ったら、非常識なことでも平気でやってしまうの」

「うん。そんな人たちが今の日本を創り上げたんだ。ぼくはタイプとしては嫌いじゃないよ」

「あなたに父の人の感想を訊いてるわけじゃないのよ」

彼女は少し声を荒立てた。けれど、全体としては息をひそめるように静かに、海辺の夜に相応

しい話し方をしていた。もっともぼくたちは口と口の間に三センチくらいしか空間がなくて、大きな声を出すと唾が飛んで話にも何にもならなかったのだけれど。

「あなたはどうしたいの？」とぼくは訊いた。

「あなたはどうして欲しい？」

「別れたくない、と一応公式には表明しておくよ」

「連れ戻しに来た父と闘ってくれるわけ？」

「まあ、スケジュールが合えばね」

悠はちょっと顔を上げて、ぼくの鼻の頭を軽くかんだ。犬がじゃれついてるみたいだ。

「基本的にはあなたが自分で決めることだよ」

「参考にあなたの意見を聞いているだけよ、もちろん」

「うん」ぼくはちよつとガツカリした。

「本当はね」としばらくして彼女は言った。「親父さんには言ったの。あなたとは別れないし、実家にも帰らないって。そうしたら、彼、何て言ったと思う？」

「クイズ番組は専門じゃないんだ」

「あてずっぽうでいいから」

「勝手にしろ。お前なんかうちの娘じゃない。これからはもう親でも子でもない」

ぼくは古いテレビ・ドラマの頑固親父の決まり台詞を声色つきで再現した。

「正解です」と彼女は笑いながら言った。腕の中で彼女の体は笑いに震えている。こっちまでつられて、陽気な気分になる。